

すが、そうではないでしょうか。

植生史研究は幅広い領域にわたっており、すべてが種という問題や標本をベースに進められているわけではありませんが、植生史研究ひいては自然史研究全体の重要な部分をなしていることは確かでしょう。植生史研究会シンポジウムでは多彩で幅広いテーマが取り上げられつつありますが、それによって多彩で幅広い植生史研究を相互理解し、全体にとっての基礎を模索しようとの要請を受けた意図があるからです。うわべだけでなく、内部から滲み出してくる諸問題を取り上げる時期も近づいてきたと、節目の年を迎えて感じているところです。

1990年1月10日 辻 誠一郎

## 相馬寛吉\*：植生史研究会談話会「花粉分析による 復元群落（植生）の空間的広がり」一趣旨説明

各花粉型から判断される分類群のそれぞれの生態学的背景を基に、古植生を含む古環境を復元する試みは von Post (1916) 以来、各種の試行錯誤を重ねて一応の成果を挙げてきた。植物相や植生型の多様な日本でも、北米や欧州と同様、現在未解決の問題を多数残しながらも、一義的な調査段階を終え、個別的な特殊問題への取組が始まっている。その一つに現地性 (autochthonous)・異地性 (allochthonous) の問題がある。これは化石全般に言えることであるが、その生物の生活範囲 (biotope) と分布範囲 (thanatotope) とが一般に一致せず、特に花粉は大気中に飛散し、大なり小なりの距離を経て堆積するからである。しかも、その間の経路は複雑で、時には更に二次的に流水などの営力が働くことも少なくない。これら複雑な花粉の動態を追求すべく、モデル化を含む研究例は多数ある。しかし、これらの研究成果は必ずしも過去の植生復元の考察に充分生かされているとは言いきれない。

このような問題を追求する場合、他の観点、即ち現実に存在する堆積物の花粉分析結果から上記の問題に焦点を合わせた考察を深める方法もある。三浦修氏は森林土壌がその場の群落の種構成を強く反映する極端な局地性の実体を取り上げ、従来の花粉分析の多くの例で、この局地性を寧ろ除外視する傾向があったことへの問題提起を含む内容を照会するであろう。また、米林仲氏は丘陵地を含む小規模の空間的広がりにおける植生の局地性を例として花粉供給源の各種群落型のモザイク分布の考察を照会するであろう。

\*〒657 仙台市青葉区川内 東北大学教養部生物学教室

Department of Biology, College of Liberal Arts, Tohoku University, Kawauchi, Aoba-ku, Sendai 980, Japan.